

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

最近のメディアでの情報は、いろんな国々の独自の身勝手なナショナリズムの台頭による国家間の紛争であり、国内では東日本大震災後の原発事故処理の問題、除汚処理後の汚染残土処理の仮置場の問題、最終処分場の問題も今だに根本的な解決がされず宙に浮いている問題。政治では、一票の格差による議員定数の違憲の問題等、未解決の問題が数多く存在する。

日本企業にとって、原発の停止、再稼働の問題は、企業の国際経済競争力に影響を与え、結果として電力供給の不安定、料金の上昇等へつながり、円高の影響、法人税率の影響等で輸出競争力はなく、全く先が見えないのが現実である。

今、一番大切なことは国家も企業も国民も、全員が一致協力して、この難局を突破することである。

それを我れ我れ個人の間人性で考えると、すべて自己中心的で、自分の都合の良いように解釈し行動する。これが人間本来の身勝手な本性の姿である。

人間の本性としての物の見方、考え方は、他の国や、他人は不自由でも、自国や企業や自分だけは自由でありたいと考えている。

それは、結果として倫理道徳観の無い、いわゆる他国あるいは他人くたばれ、我れ繁盛の人間性の世界であり、一人一人が違う現実、環境の中で生活しているにもかかわらず、自分のすることはすべて正しいという考え方に起因する行動をとるのである。

仏教の教え、いわゆる釈迦は「他思故有我」であり常に己れの存在を否定して、相手の存在を考え共存する「和」の心を説いている。

その基本は、常に己れに厳しく努力、精進することを説いている。

著者：広島大学生物生産学部非常勤講師

元近畿大学産業理工学部客員教授

日本禅画家協会名誉理事

中国少林書画院名誉教授

法号位 法印 禅画位 奥伝

青木伸雄

釋 禪 禪 (野風生)

雅号 樹泉

そこで、仏教の根本思想である「諸行無常」、「諸法無我」、「涅槃寂靜」、「一切皆苦」等を学び、この混沌とした時代の生き方を学び、己れを「乞食」の立場においた場合の「乞食行」を学び知り、各々の置かれている立場での人間としての有り方を学び努力、精進している小学校の若き先生方の生きざまについて述べることにする。

そこには、人間社会において生活する人々は、それぞれ皆んな同じ現実を受けているのではなく、違う現実、環境の中で精一杯の努力をしている姿があるということである。

我慢と忍耐も必要であり、他人くたばれ、我れ繁盛の生き方は決してすべきではない「一切皆苦」の教えを知り経営者、管理者、個人も協力すべきである。

2. 諸行無常を学ぶ

仏教の教えの根本思想、三法印の一つとして昔から、万物は常に変化して、少しの間もとどまることなく変転して、やむことがないと、語りつがれた教えであり、いわゆるつくられたものは移りゆくということである。人の世のはかなさの教えでもある。

それは、「一切有為法は念々刹那に生滅する」無常偈として、涅槃経、弥勒成仏経等で「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽」と述べられているが、これを解釈すると、一般に「もろもろのつくられたものは無常、いわゆる一切のものは生滅、変化して常住ではない。生じては滅びる性質のものである。生じては滅びる、それらの静まることが安楽である。」という

